日本史伝川柳狂句

十一

岡田三面子編著
中西賢治校訂

古典文庫

岡田三面子編著
中西賢治校訂

日本史待川柳狂句

十一

古典文庫

古典文庫第三六〇冊©

昭和五十一年十月二十日印刷発行　非売品

日本史伝川柳狂句
第十一冊

校訂者　中西賢治
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

凡　例

一、第十一冊として、三面子原文の第十一冊の始め、近古之巻、一、源平時代「安徳天皇」（一〇〇八頁）から、実平（一〇八六頁）までを収めた。

一、校訂に際しては、三面子原文を見得る限りの原本によって照合し、欠字（伏字）を充塡し、出典を補訂した。

一、終りに、翻刻にあたり、三面子原文の欠字充塡その他について貴重な資料を御貸与下された千葉治氏、三面子旧蔵本の閲覧については、進士慶幹氏ならびに日本大学総合図書館、新編柳多留については、東洋文庫、また句の出典については、濱田義一郎氏ならびに日本大辞典刊行会の芳賀定・倉島長生・鈴木一氏の皆様に一方ならぬ御世話に相成った。ここに記して厚く御礼申し上げる次第である。

昭和五十一年六月二十五日

中西賢治

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

岡田三面子先生遺稿

日本史伝川柳狂句　第十一冊

（近古之巻　一、源平時代つづき）

○安徳天皇（一一八五）

一、御系統

○高倉帝の第一皇子、母は清盛の女建礼門院平徳子、養和元（一一八一）年三才にして即位、

檜扇子の御手を清盛笏にさせ　明三戌・仁一オ

母方に安ンとくていハずりこまれ　安四未・智七ウ

二位のあますそをとらへてあそばせる　安三午・桜二ウ

入道にあつちへいけとみことのり　拾六・四オ

ぬえが出ますぞと二位どのたゝき付　一三・二八オ

むつかると鵺（ヌエ）が出ますと二位おどし　一三二・二五オ

ピイ〳〵や哥でいかぬと能登守　安三午・仁一オ

二位殿におぶつてでろとみことのり　明三戌・宮一オ

魚こい〳〵と二位殿ハシゝをやり　梅柳二四・二七ウ

おふさつて出よふとすまのみことのり　明八卯・桜一オ

たんの浦内へ行ふとみことのり　明三戌・宮二ウ

ふねは沈て立ッ波に御衣がぬれ　嘉五・入一四オ

寿永の海に十善の土左衛門　八八・八オ

寿永の海にやことなき土左衛門　保八・七・四オ

龍宮騒動安徳帝御幸　一六七・二六オ

一門ハどふり〳〵とそうもんし　〔宝一一巳・智一オ〕

みくずにならせ給ふとハやすいとく　安九子・宮二ウ

安イ徳帝位八年ン水の泡　五四・四〇ウ

寿キハ永からさりし帝位也　一二一乙・四五ウ

西海の波に漂ふ龍の御衣　一三五・一六オ

あたらしい徳ハ二十一チねん目　和笛天二寅・八・四竹一オ

二、女帝との憶測

○后御産の時、御殿の棟より甑(こしき)を皇子には南へ、皇女には北へ転(まろ)はす式あり、帝出生の時北へ落とし、忽ち改めて南へ落としたりとの平家物語に基づき、帝を女帝とするの俗説あり、

甑(コシキ)もてソレ桑の弓蓬の矢　六五・一四オ

安イ徳ゆへに甑も二度になげ　一二二乙・九オ

甑(こしき)をはなけ直してもたんの浦　宝七丑・一一・五日オ

大原のこしきもいらぬ御安産　宝八寅・桜二オ

右ハ参考句

一チ門かよつてこしきに手めをさせ　宝九卯・梅二

めゝつこを御ちんこなどゝ二位のあま　天六午・和三ウ

人の見ぬ方へ二位殿しゝを遣リ　明四亥・智二オ

めゝつこが出ると二位どのおつかくし　〔明三戌・桜六ウ　末初・六ウ
安三午・仁五ウ　末二・五ウ〕

しゞみ貝海へかくした二位の尼　一〇六・二六オ

三、聯　想

在位十九年でひなのはらひ物　天元丑・智一ウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

——厄年の十九で娘死す

流し雛主上をはじめたてまつり　四九・六オ

——質

○二位の尼（一一八五）

○文治元年三月二四日、主上八歳、二位殿君に向ひ「……西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべシ……」と慰め参らせ……小いさう美くしき御手を合せ……西に向ひ御念仏ありしかば……二位殿いだき参らせて、波の底にも都のさぶらふぞと……千尋の底へぞいり給ふ（平家物語巻第一一）、其の折尼神器の一なる宝剣を帯びて入水し、遂に再び世に出でず（看有馬家）

二位どのは後生ごゝろも有た人　玉・二六ウ

さかまく浪に泣沈む二位の尼　嘉元・小樽〇一オ

ボチヤ〳〵へサア御だつこと二位の尼　新二・ツイ一四オ

海底に都ありとハへらすくち　宝九卯・満一

前句・とふよくな事〳〵

福原の後チわたつみへつれ申　二四・二ウ

二位とのハいやなみやこへつれ申　天五巳・礼二オ

都ありとハと還御の無(カメ)キ御幸　〔保一〇・いと八八オ　〔嘉六・カメ一ウ

袞龍ハ海へひそまる檀の浦　化?月・江六ウ

だいてはいるとハ二位どのか言はじめ　八・五オ

櫛巻にしろと二位どの下知をなし　拾五・二三オ

二位とのハ小意地をわるくさして行　〔明五子・信一オ六・二七ウ〕
二位どのハ我物貞に一本さし　五五・一六ウ
二位殿の持て行カれて壱つかけ　明五子・仁一ウ
二位どのハ跡ト二タ品に手ハつけず　安元辰・礼一ウ
二位殿ハ袋のまんま壱本きめ　安元辰・仁二ウ
二位殿の入水年には不足なし　七〇・二四ウ
二位のあま破レかぶれにほうり込み　明三戌・桜四オ
二位殿ハきたなひれすにドサラなげ　明四亥・仁一ウ
二位どのハマメだと遣リ手バ、ア也　安五申・雀二ウ

○五家の庄（一一八五↓）

○一名五ヶ村、肥後国八ッ代郡にあり、後鳥羽文治中、平家高貴の人人入水と披露し、其実は此山中に陰れ、子孫今幾千万人に成りしなり

（塵塚談）（看流れ枕）

一門の平にすめる五ヶの荘　弘二・但二九オ

生ケておく五ヶ村ハ皆芋の種　安政元・リ一〇六オ

平種か芋を掘てる五ヶの庄　安政元・リ一〇五オ

○宗　清（一一八五）

○鎮守府将軍平の貞盛八世の孫、弥平兵衛と称し、平の頼盛に仕ふ、永暦元（一一六〇）年美濃の国青墓の駅にて頼朝を捕へ、六波羅に送る、清盛之を殺さんとしたるに、宗清は池の尼及び重盛を経て助命を

乞へり、後年頼朝其の恩を思ひ、頼盛と宗清とを、鎌倉に招致したるも、宗清のみは之を辞し、宗盛に仕ふ、平民亡ぶるの後、宗清遁れて終る所を知らず、

ウヨヒヨを弥平兵衛ハからめとり　天三卯・八・五ウ

——嬰児

乳のみ子に弥平兵衛ハ見しられる　明八卯・宮一ウ

かまくらへ来ぬので弥平兵衛なり　宝一三未・礼一オ

むねきよか来たらと金のねこか出来　安九子・義三ウ

——西行には銀の猫

田舎へハゑゝ下るまいと宗清　筥四・一〇オ

わけのよひ男ハ弥平兵衛なり　〔明七寅・松三オ〕〔拾五・二七オ〕

へつらハぬ男はムネが清イなり　一五・二五オ

ムネがにごらぬでかまくらへハ行ず　一三・一一ウ

八まんへ宗清ついにまいらない　安五申・梅四ウ

——鎌倉の

むね清は霸の舞ふのを見ぬ男　明六丑・雀一オ

人のすくかつほむね清きらひ也　一三・三二オ

——鎌倉

宗清ハ源氏の土をかりて死　安六酉・正・一五日オ

——平家全滅後

○重　衡（一一八五）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb